

JAF AE Newsletter



No. 19 (July 2006)

第 19 回全国大会/青山学院女子短期大学にて開催

プ ロ グ ラ ム

日時: 2006 年 7 月 1 日 (土) 10:00 - 17:40
場所: 青山学院女子短期大学 南校舎 S101 教室

大会総合司会: 矢野安剛 (早稲田大学)

開会の辞: 湯本久美子

(大会実行委員長・青山学院女子短期大学)

開場校挨拶: 深町正信 (青山学院院長)

会長挨拶: 本名信行 (青山学院大学)

特別講演: (青山学院英語教育研究センター共催)

Andy KIRKPATRICK

(Hong Kong Institute of Education)

“Asian Englishes: Implications for International
Communication and English Language Teaching”
会員総会

研究発表 第 1 部

司会: 相川真佐夫 (京都外国語短期大学)

1. Donald SMITH (ノートルダム清心女子大学)

“English in Disguise: Japanese renditions of words
swiped from English”

2. Mathew VARGHESE (青山学院大学)

“Thinking in English as a pedagogic method and
the conception of English as the other language”

3. 沈瑩 (東北大学大学院)

“An analysis of the use of discourse markers
(particles) in English compositions made by native
and non-native English speakers”

研究発表 第 2 部

司会: 徳地慎二 (宮崎産業経営大学)

4. 研究助成プログラム研究成果発表

梨本篤司 (青山学院大学)

「カンボジア人、タイ人、ベトナム人の英語自然
発話の量的調査」

三宅ひろ子 (青山学院大学)

「マンガと Manga: World Englishes の観点から」

5. 苗床光太郎 (熊本学園大学大学院)

「Kachru's three circles から見た中学校英語教科
書に登場する国とその文化の扱い方の変遷」

6. 中原功一朗 (関東学院大学)

「日本人の Taglish への対応力」

7. 湯本久美子、松村伸一

(青山学院女子短期大学)

「青山学院女子短期大学における

World Englishes の理念」

パネル・ディスカッション

「ESSC (Extremely Short Story Competition)

—日本におけるその意義と実践」

コーディネータ: 竹下裕子 (東洋英和女学院大学)

発題: 本名信行 (青山学院大学)

「ESSC の意義」

実践報告: 岡裏佳幸 (福岡工業大学)

エリック・ベレント (清泉女子大学)

津田早苗・ベバリー・ラファイエ

(東海学園大学)

支援出版社より: (株) エドベック

応募要領: 徳地慎二 (宮崎産業経営大学)

閉会の辞: 森住衛 (桜美林大学)

18:00 懇親会 (チャックワゴン)

第 19 回全国大会を振り返って

森住 衛 (桜美林大学)

本学会の大会は 1 年に 2 回開いているので、第 19 回目ということは、学会創立 10 年目に入ったということである。本大会は、この 10 周年記念大会にふさわしい有意義な大会であった。

矢野安剛氏の総合司会のもとに、定刻通り、開会式、基調講演と続いたが、私は校務のために、

基調講演が終わってからの参加であった。そのため、湯本久美子大会実行委員長、深町正信青山学院院長および本名信行会長の挨拶、Andy Kirkpatrick 氏による基調講演 “Asian Englishes: Implications for International Communication and English Language Teaching” を拝聴できなかった。基調講演は、側聞するところによると、アジアをはじめとする国や地域で使われる英語はそれぞれの特徴をもって然りという、「アジア英語」学会員の我々を勇気づけるものであったという。

基調講演のあとに会員総会があった。通常の活動報告・予定および会計決算・予算の審議のあとに、10周年記念事業として、ESSC (Extremely Short Story Competition) を実施することが決まった。この企画は、Englishes で書かれた 50 語の文章を世界中から募り、Web で配信し、その中から優秀な作品を選考するというものである。昼食休憩中に開かれた理事会では、この案件をさらに詰めて、最終的には、応募者を中学、高校、大学/一般の 3 部門に分けて、10 月以降に募集を開始し、本年度中に第 1 回の選考を行うことになった。

午後の 1 つ目のセッションでは、相川真佐夫氏の司会で、Donald Smith、Mathew Varghese、沈瑩の 3 氏の発表があった。Smith 氏は日本語のカタカナ語が日本の英語教育に及ぼす影響を取り上げた。英語学習に利用できる場合とそうでない場合とに分けた解説は合点がいくものであった。Varghese 氏は英語教育における Thinking の効用を論じた。専門のインド哲学やサンスクリットまで遡り、Thinking と人間の生き方にまで及んだ内容であった。沈氏の発表は、英語国民・中国人・日本人が英語を使う際に用いる Discourse Marker を比較したものであった。英語国民 vs 中国人・日本人の対比が興味深かった。

次のセッションは、徳地慎二氏の司会のもとに計 5 本の発表があった。まず、研究助成プログラム研究成果として、梨本篤司氏がカンボジア・タイ・ベトナム人による英語の自然会話について発表した。これまであまり調査されていない地域の貴重なデータも披露してくれた。もう 1 本は三宅ひろこ氏の発表で、日本のマンガを World Englishes の視点から取り上げたものであった。マンガが英訳されてアジアに広がる場合に、原作か

ら変わる部分と変わらない部分があるという分析が興味深かった。次に、一般の研究発表に移り、苗床光太郎、中原功一郎、湯本久美子/松村伸一の各氏による 3 本の発表があった。苗床氏の発表は Kachru の 3 つの Circle の国や地域が日本の中学英語教科書にどのように取り上げられているかに関するものであった。聴衆の中には末延岑生氏や私も含めて教科書執筆者がいたので、質問や所感にも熱が入った。中原氏の発表はフィリピンの Taglish に対する日本人の理解度に関するものであった。調査結果によると、理解度はかなり高いもので、日本人の Japlish も堂々と使っていると感じた。最後は湯本/松村両氏が青山学院女子短期大学で実践されている World Englishes の理念についてであった。教員の中に英語が Non-native である外国人教員 3 名がいること、そのため多様な英語が使われているという報告が印象的であった。

最後のセッションは、竹下裕子氏の司会によるパネルディスカッション「ESSC—日本におけるその意義と実践」であった。パネリストは、本名信行、岡裏佳幸、Erich Berendt、津田早苗、Beverley Lafaye、Basil Tonks、徳地慎二の各氏であった。本名氏の ESSC 設立の趣旨に始まり、いろいろな実践事例や支援体制、応募方法の説明があり、ESSC の全体像がいよいよ明確になった。

閉会の辞は私が担当した。各セッションに簡単なコメントを付したが、最後に、ESSC の実施は、Asian Englishes の普及のために、本学会が〈運動体としての学会〉という新機軸を出すという点で大変意義深いと締め括った。最後に、このような意義ある大会を運営してくれた湯本久美子実行委員長をはじめ関係者に改めて感謝を申し上げたい。



第 19 回大会のワンシーン

特別講演レビュー



Andy Kirkpatrick 氏
(Hong Kong Institute of Education)

“Asian Englishes: Implications for International Communication and English Language Teaching”

原 隆幸 (明海大学大学院)

今回の大会には、Hong Kong Institute of Education 英語系教授である Andy Kirkpatrick 氏が特別講演者であった。Kirkpatrick 氏は Kachru の英語の“circle”分類を用いながら、ELT における3つのモデルを紹介した。それは Exonormative Native Speaker Model (以下、ExoNS モデル)、Endonormative Native Speaker Model (以下、EndoNS モデル)、“Bilingual” Model (以下、バイリンガルモデル)である。現在、ExoNS モデルか EndoNS モデルのどちらかが選ばれる傾向にある。ExoNS モデルは、多くの外側サークルとすべての拡大サークルの国々で選ばれる。香港ではイギリスモデルが、日本ではアメリカモデルが選ばれる。その理由として、このモデルは権威があり正当性があること、ExoNS モデルに基づいた ELT の教材が利用できること、世界中の教育省が自国の国民に“best”なものを提供したいことを挙げている。ExoNS モデルは、アメリカやイギリスの ELT 産業に対して利益がある。教材を売り、IELTS や TOEFL といった国際的なテストやテストシステムを発展させる。ネイティブスピーカーは ELT の訓練を受けた専門家ではなく、ただネイティブスピーカーであることが、世界中の学校や大学などで

求められる。例えば、韓国政府が 1,000 人のネイティブスピーカー英語教師を求人するとき次のような広告を掲載した。タイプ1の教師は TESOL の資格か、TESOL での学位を持ち 3 年のフルタイムでの教職経験があるか、韓国の文化・言語を経験し、関心があることを要求される。タイプ2の教師はどの分野でもいいが学士号を持ち英語のネイティブスピーカーであることのみを要求される。イギリスの新聞に掲載された広告で、ELT のリクルート会社が日本の学校で教える教師を募集した。そこでの ELT 教師は「やる気のある、活気に満ちた新卒」であることと「子ども好きでなければならない」ことを要求したが、教職や TEFL 経験は要求されない。ネイティブスピーカーを選択することは、非ネイティブスピーカーであるその土地の教師に対して不利である。ネイティブスピーカーモデルの選択は、その土地の教師のモデルの価値と正当性を傷つけ、またネイティブスピーカー教師の教授法(英語の授業では L1 の使用を避ける教授法)の選択を決定する。しかし、バイリンガルであることは、言語学習の経験があるので、語学教師にとって利点である。また学習者の言語を知ることでも語学教師にとって利点である。ExoNS モデルは、達成できない不適当なモデルであるので、大多数の生徒にとって不利である。外側サークルの国々で用いられる EndoNS モデルは、その土地の変種を話す教師、全体としての教育システム、その土地の政府と生徒にとって有利である。EndoNS モデルは、その土地のモデルが整備されず、またその土地のモデルに基づいた教材がなければ教師にとって不利であり、その土地のモデルが権威のない、国際的に理解できるものでなければ学習者にとって不利である。バイリンガルモデルを選択すれば、その土地のバイリンガルの教師は役割を得て言語的モデルとなり、学習者は学習するにあたり適切な達成できるモデルを得る。授業は国際的で異文化間のコミュニケーションに焦点を当て、またコミュニケーションに焦点を当てる。ELT 教師に対する要求は次の8つである。(1)多言語的、多文化的になる(実際に学習者の言語の話し手である)、(2)その土地の英語変種の役割を理解する、(3)どのように英語の変種が発達してきたかを理解する、(4)どのように

英語が広がってきたのか、(5)どのように英語がその土地の言語と相互に影響し合うかを理解する、(6)ELT 教材を批判的に評価することができる、(7)生徒の特定のニーズを決めることができる、(8)課外活動を手伝うことができる。最後に(アジアにおける) TESOL コースは、(1)どのように英語のシステムとアジアの言語が異なり、相互に影響を与えているのかを理解し、(2)学習者に特有の困難さを分析でき、彼らがそれを乗り越えられるように手伝い、(3)英語がアジアで多くの変種として表されていることを理解し、(4)これらの変種が完全な言語システムであり、(5)バイリンガルマルチリンガルであり、多文化的であることの重要性を理解し、(6)その土地のコンテキストにおける、そしてその土地の言語と英語の役割を理解し、(7)その土地の教育と文化の伝統を理解する教師を生み出すべきであるとして、講演を締めくくった。

パネルディスカッション

ESSC (Extremely Short Story Competition)

一日本におけるその意義と実践

竹下裕子 (東洋英和女学院大学)

ESSC 実行委員会委員長

第 19 回全国大会のパネルディスカッションは、学会創立 10 周年記念事業のひとつである ESSC (Extremely Short Story Competition) をテーマとした。2006 年 10 月の一般公募に先駆け、まずは学会員の ESSC に対する理解を深め、その教育的意義を確認し、学会員にとどまらず広く一般にこれを認識していただき、普及に努め、この事業の実施に向けた動機づけを目的とするものであった。

コーディネータを務めた竹下によるパネルの主旨説明に続き、本名信行会長より、ESSC とは何か、そしてその意義はどのようなものであるか、詳細な発表があった。ESSC はザイド大学 (アラブ首長国連邦) の Peter Hassall 教授が考案したものであり、50 語で書かれる自由作文である。長い作文に対する苦手意識を持つ学生であっても、とても短い (extremely short!) 作文であれば、意欲的かつ創造的に取り組むことが可能である。実

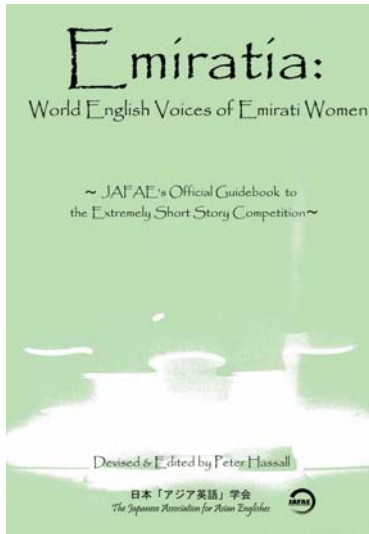
際、本名氏が青山学院大学の学生を対象に実施した実験的 ESSC には、興味深い作品が多く寄せられている。文法的には修正を必要とする表現も多少含まれてはいるが、いずれも、若者らしい発想による想像性豊かな作品であった。50 語という制限ゆえに、日本人学生をはじめとするノンネイティブスピーカーのハンディが最小限に抑えられ、ネイティブスピーカーとも競うことができること、さらに学会が ESSC を実施することにより、多くの作品が集まれば、それを日本人の英語のデータベースとして「二ホン英語」の研究の幅が広がる可能性があることなどを本名氏は強調した。

ESSC の意義が明らかになったのち、3 大学からの実践報告が行われた。まず、福岡工業大学の岡裏佳幸氏は、非常勤校である九州大学の 1 年生の授業における実践例を提示した。また、ESS のセンテンスの数、テーマ、接続語などの視点から、作品を分析した。次に、清泉女子大学のエリック・ベレント氏は、2005 年度と 2006 年にかけて 2 年生の授業で収集した ESS を提示し、ESS と俳句の感覚的な類似を指摘した。作品には、フィリピン人の学生によるものも含まれていた。東海学園大学からは、津田早苗氏とベバリー・ラファイエ氏がそれぞれ 3、4 年生の担当授業からの実践例を報告した。さほど英語が得意ではない学生による作品を用いて、ありがちな「間違い」とその指導法も示された。

実践例の提示により、ESSC に対する会員の実感が高まったところで、株式会社エドベックのバジル・トックス氏より ESSC に寄せる支援と激励を語った。本学会の法人会員であるエドベックは、ESSC 後援団体のひとつでもあり、ESSC オフィシャルガイドブック (後述) の出版社でもある。さらに、宮崎産業経済大学の徳地慎二氏より、応募方法の説明があった。ESSC の大きな特色のひとつは、ウェブ上でパワーポイントファイルを用いて応募することである。応募作品は、応募月日および応募者ジャンル (中学生、高校生、大学生一般) に分類され、本学会ホームページに掲載される予定である。

教員による ESS の指導のためにも、またこれに挑戦する学生のためにも、オフィシャルガイドブック、*Emiratia: World English Voices of Emirati*

Women ~ JAF AE's Official Guidebook to the Extremely Short Story Competition ~ (税込 945 円) が大変に有効である。本書は、Hassall 氏の編集による *Emirata: Voices of Zayed University* (Zayed University. ISBN 9948 03 1549) の日本版である。ESSC 実行委員会によるご案内、Hassall



氏が特別に日本版に寄せた前書きとその日本語概略、そして受賞作品を含む多数のアラブ首長国連邦の ESSC が掲載されている興味深い一冊である。

本書のエドベックからの購入方法は、

学会ホームページ < <http://www.jafae.org/> > の「ESSC のご案内」を参照していただきたい。エドベックへの支払いは代金引換となる。不都合が生じる会員のために、実行委員会が多少の在庫を持ち、銀行振込を可能にしている。お問い合わせは ESSC@hotmail.co.jp まで。

第1回 ESSC の一般公募は、中学生の部、高校生の部、大学生一般の部に分けて 10 月より開始される。応募要領は学会ホームページに掲載する。会員には、このディスカッションを契機に ESSC の意義をご理解くださり、またご賛同くださり、ご勤務校におけるご指導はもちろん、広く英語教育関係者にお伝えくださり、学会の事業として成功するよう、多大なご協力をいただきたい。また、この事業が日本国内にとどまらず、アジアの国々をはじめとする多くの諸外国の英語教育関係者および英語学習者の理解を得られるならば、ESSC の教育的効果が波及するだけでなく、日本「アジア英語」学会の大きな発展にもつながると信じている。

新会員の学会感想

齋藤智恵 (国士館大学 非常勤講師)

この度初めてアジア英語学会に参加させていただきました。勉強不足の私は、これほど多くの方々が熱心にアジア英語の研究に取り組んでいらっしゃることに感銘を受けました。興味深い Kirkpatrick 先生の特別講演、様々な角度からアジア英語を捉えた研究発表、ESSC に関するパネルディスカッションと、全てのプログラムにおいて好奇心をかき立てられ、わずか一日でこれほど多くのことを学び、考えさせられる機会を与えていただいたことに心から感謝いたします。特に ESSC はその意義と実践例を多くの教育現場からご報告いただき、自分自身のクラスでも実践し、ESSC に参加しようと決意した参加者は私だけではないはずです。最後に本学会についてご紹介くださった本名先生に心より感謝いたします。

フィジーで出会った姉妹のこと

後藤田遊子 (北陸学院短期大学)

南太平洋の島国フィジーは人口約 84 万の小さな国ですが、先住民のフィジー人と移住民であるフィジー系インド人の人口比率が 54%と 38%、残りがその他の民族という構成で多民族社会を形成しています。英国の植民地政策 (1894 年～1970 年) の遺産である英語が共通語・公用語の役割を担い、学校教育の媒介言語としても英語が使用されています。

都市部でホームステイをしていたときのことで、休暇を利用して山奥の村から遊びに来ていた、この家の主人の親戚、ミリとメレ (いずれも仮名) という姉妹に出会いました。17 歳の姉ミリは、流暢な英語で、将来は南太平洋大学に進学して会計士になる夢を語っていました。彼女たちの村では、フィジー語 (方言) のみのモノリンガルな生活に加え、電気が来ていないため、テレビやラジオを通して英語に親しむこともできません。それにもかかわらず、英語で教育を受けると、ここまで運用能力が培われるのかと驚かされました。

町に滞在するのは初めてという 12 歳の妹メレは、語彙の不足からか、英語での会話こそ深まり

ませんでした。彼女の利発さを示す英語のパフォーマンスを披露してくれました。フィジーの民話を英語ですらすらと暗誦したのです。英語の授業で使う副読本を丸暗記していたようでした。フィジアン人の暗誦力・暗記力のすごさを聞いていた私は、なるほどと納得しました。民話を暗誦して得意になったメレは、今度は、姉と一緒にハーモニーを利かしたフィジー語のゴスペルを歌ってくれました。さらに、伝統的なメケダンスまで披露し、彼女たちにとって滞在中のハイライトとなったようです。滞在先の家庭では、近代的なベッド・ルームを姉妹で使用し、お湯の出るシャワーを使い、規則正しい食事をし、初めて食べたマクドナルド・ハンバーガー、DVD 映画など、近代的な生活を楽しんでいました。

私がホームステイを始めてから数日後、この家に泥棒が入り、一緒に滞在していた友人の部屋が荒らされ、現金や CD プレイヤーが盗まれました。どうやら私たち外国人が狙われたようで、夜遅くに警察が来て家族が深刻に対応していました。私も、フィジーの都市における治安の悪化を耳にしていたので、不安な気持ちを隠すことができませんでした。この事件が起きてから、メレは急に村が恋しくなり「早く家に帰りたい！」を連発し始めました。私はメレを見て、ふとイソップ物語に登場する「田舎のねずみ」を思い出しました。メレはあこがれの都会で、恐るべき経験をしてしまったわけで、静かな田舎に早く帰りたいと願うメレの表情から、「幸せな生活とは何？」と改めて自問自答させられました。



フィジーの農村、パパイア畑の小道にて

“ゆったりとした時間の流れに身を任せ、ごろりと横になっておしゃべりに興じる”といった、フィジーに対する楽園イメージを逆撫でする事件のおかげで、姉妹は予定より早く村に戻って行きました。しかし、若者の村離れが進むフィジーです。この姉妹の将来を見通すことはできませんが、いずれ町（近代）と田舎（前近代）を行き来するたくましい女性に成長するでしょう。姉妹の未来に幸あれと祈りました。

第 2 回 カンボジア

TESOL 研究大会に参加して

川畑松晴（金沢学院大学）

2月25～26日にカンボジアの首都、プノンペンで開催された、2nd CamTESOL Conference on English Language Teaching “Improving the Practice”に参加してきた。昨年に続いての参加で、今年はポスターセッションで発表もした。“Comparative Study of Junior High School English Textbooks in Cambodia, Japan and Vietnam”というタイトルで、3国の中学レベルの英語教科書を比較することを通して、ベトナムがいかに見事に文法中心・英国文化中心のテキストからコミュニケーション志向・ベトナム文化中心の教科書に転換しつつあるかを、カンボジアの英語教育関係者に訴えるのが目的であった。カンボジアの教科書はベトナムの旧版と同様、小型でモノクロ頁が大半である。また、文法中心というより、むしろ読み物が中心であるが、教科書編集の常道「易から難・単純から複雑」の原則が貫かれておらず、新規導入項目（語彙・文法）と既習事項の組合せがよく考慮されず、恣意的に作られている。筆者は日本の薄っぺらな検定教科書より、ベトナムの整合性に富む新しい国定教科書の方により強い魅力を感じるが、それはとにかくとして、カンボジアの教科書が早急に改革されることを願っている。今回の私の発表は、残念ながら、そんなに大きなインパクトを与えたように思われないが、それでも多くの中学高校の英語教師や大学の研究者がポスターを読み、一部の人たちと意見交換をすることができた。彼等の目を隣国や日本のより進ん

だ？教科書に目を向けさせる端緒となれば良いのだが。



会場のパナサストラ大学

さて、この研究大会は、2回目と歴史は浅いが、その割にはよく組織化され運営されている。オーストラリアの教育 NGO “IDP” が中心となり、カンボジアの教育省及び国内で活動している英語教育団体・個人の協力を得て、企画・組織・プログラムの3委員会が設けられている。また、今回はアメリカ大使館の財政支援により、地方の英語教師が多く参加していた。この大会の趣旨は “to keep the sessions practical and relevant for classroom teachers” である。この研究大会は彼等のために開かれているのだ。参加者の内訳は次の通りである。全体では2日間で延べ760人。530人はカンボジア人、その内地方公立学校教師が135人ということだ。外国人は101人。日本人発表者4人、日本の大学で教えている外国人の発表者5人。その他日本人の一般参加者も数名見られた。発表はワークショップ、ポスターセッション等を含めて全部で113。昨年の50の倍増以上である。

発表は募集段階から、プログラム委員会によって、各分野が明確に提示されている。今回の113の発表は次の13分野にまとめられ、別々の教室で同時進行された。

1. Program management,
2. Curriculum & materials development,
3. EAP/ESP,
4. Independent learning,
5. Methodology,
6. Motivation,
7. Professional development,
8. Teaching reading,
9. Teaching speaking,
10. Teaching writing,
11. Testing,
12. Using technology,
13. Teaching young learners

一つの発表時間は質疑応答を入れて45分間。90分のワークショップもいくつかあり、大会のテーマである “Improving the Practice” に沿った、非常に実践的な発表が多く、また、近年の英語教育学の知見（例えば、言語機能、タスク、自立学習、アクションリサーチ、CALL等）に基づいた発表をカンボジア人の若い教師が堂々と英語でしているのを昨年、今年と何度か拝聴してとても頼もしく、また感動も覚えた。必ずしもオーストラリアやシンガポールの大学院で学んだものばかりではなく、プノンペン国立大学その他の修士課程修了者もいて、この国の高等教育もかなり充実しつつあることが窺い知れる。

とは言うものの、“Professional development” の分野の発表・ワークショップが盛況で、多くの若い教師が参加していた。また、世界の最貧国の一つに数えられるこの国の教育事情を反映した、例えば、“... but there's no course book! – Creating Materials for Customized Courses” とか、“How to Teach English in Large Classes in Cambodian State Secondary Schools” のような発表がカンボジア人教師によって多くなされてもいた。



カンボジアの女性教師と

第3回大会は2007年2月24・25日に予定されている。発表のみならず、ランチタイムや土曜日の親睦パーティでの美味しい食事、様々の国籍の英語教師との語らいは日本での大会では得られないものだ。発展途上国の英語教育への熱気（気温も高い!）をあなたも味わってみませんか。

詳しくは、IDP 又は CamTESOL の HP を御覧下さい。

新 刊 案 内

『オセアニアのことは・歴史』

岡村 徹著

溪水社

ISBN: 4-87440-923-7

価格: 1,800 円+税



本書は、オセアニア地域のこ
とばと歴史を紹介したものであ
る。前半部はナウル島、ノーフ
オーク島、ニューギニア島などの島嶼地域の記述
が中心である。後半ではオーストラリアの言語的
世界を平易なことばで説明している。

[http://www.keisui.co.jp/cgi/kensaku.cgi?isbn=ISBN
4-87440-923-7](http://www.keisui.co.jp/cgi/kensaku.cgi?isbn=ISBN4-87440-923-7)

事務局からのお知らせ

1) 住所変更について

学会からの送付物にはメール便を利用しており
ます。郵便局に住所変更届を出されても転送され
ない場合がありますのでご住所に変更があり次第
事務局までご連絡下さい。

2) 2006 年度研究助成プログラム

2006 年度研究助成プログラムには 2 件の申請が
あり、5 名の審査委員による厳正な匿名審査の結
果、藤原康弘会員（大阪大学大学院）および岡裏
佳幸会員（福岡工業大学）への給付が決定いたしま
した。

3) 10 周年記念出版について

本学会では、10 周年を記念して、会員による本
会の研究趣旨にあった、一般向けの論考の書籍を
発刊したいと考えております。執筆希望の方は、
8 月末日までに、担当理事の河原までご連絡くだ
さい（nrj43093@nifty.com）。執筆要領は紀要の
規定に準じます。詳細に関しては、後ほど担当理
事から執筆希望者宛に連絡があります。

4) 次大会について

第 20 回全国大会は 12 月 2 日（土）に清泉女子
大学（東京都品川区東五反田）にて開催いたしま
す。大会実行委員長は同大学の同大学の石田雅近
先生です。

第20回全国大会研究発表者募集

第20回全国大会（2006年12月2日（土）、清泉
女子大学）で研究発表を希望される方は、要旨
（日・英どちらか）をWORDで1枚にまとめ、9
月30日(土)までに大会担当理事の榎木蘭まで電子
メールにてお送りください。

htenokizono@yahoo.co.jp

CALL FOR PAPERS for the 20th National
Conference on December 2nd, 2006 at Seisen
University. The Conference Committee invites
submission of abstracts for papers.

Submission is accepted only by e-mail. Please
write a 1-page abstract with MS WORD and e-
mail it to Professor Enokizono at
[htenokizono@yahoo.co.jp]. The deadline is
Saturday, September 30, 2006.

会 計 担 当 理 事 よ り

1) 会計報告

日本アジア英語学会 2005 年度決算

収 入 (円)			
費目	2005 年度 決算額(A)	2005 年度 予算額(B)	増減(A-B)
年会費	771,378	1,180,000	△408,622
全国大会	115,000	300,000	△185,000
（第 17 回兵庫県立）	(61,000)	-	
（第 18 回京都外大）	(54,000)	-	
モノグラフ紀要売上	71,700	20,000	51,700
大会補助金（大学より）	0	100,000	△100,000
その他（貯金利息など）	5,031	0	5,031
前年度繰越金	837,693	837,693	0
合計	1,800,802	2,437,693	△636,891

支 出 (円)			
費目	2005 年度 決算額(A)	2005 年度 予算額(B)	増減(A-B)
通信費	141,086	250,000	△108,914
ニュースレター印刷費	123,900	120,000	3,900
紀要制作費	174,825	300,000	△125,175
文房具	2,783	10,000	△7,217
全国大会	192,492	250,000	△57,508
人件費	5,375	40,000	△34,625
インターネット接続費	47,580	24,000	23,580
印刷代（学会封筒）	45,680	40,000	5,680
事務局運営費	140,770	100,000	40,770
理事会運営費	0	200,000	△200,000
モノグラフ補助費	189,000	200,000	△11,000
研究助成金	0	200,000	△200,000
分科会助成金	0	100,000	△100,000
10 周年記念事業費助成金	500,000	500,000	0
次年度繰越金	237,311	303,693	△66,385
合計	1,800,802	2,437,693	△636,891

上記の通り、ご報告いたします。

2006年7月1日

会計 河原俊昭

2005年度決算報告の監査を行った結果、適正であると認めます。

2006年7月1日

会計監査 矢野安剛

会計監査 森住 衛

日本「アジア英語」学会 2006年度予算

収 入 (円)			
費目	2006年度 予算額(A)	2005年度 予算額(B)	増減(A-B)
年会費	1,180,000	1,180,000	0
(正会員 200名)	(1,000,000)		0
(学生会員 30名)	(90,000)		0
(法人会員 3名)	(90,000)		0
全国大会	300,000		0
モノグラフ売上	100,000		
大会補助金	100,000		
10周年記念事業費立金	500,000	0	500,000
前年度繰越金	237,311	837,693	△600,382
合計	2,417,311	2,437,693	△20,382

支 出 (円)			
費目	2006年度 予算額(A)	2005年度 予算額(B)	増減(A-B)
通信費	250,000	250,000	0
ニュースレター印刷費	180,000	120,000	60,000
紀要制作費	200,000	300,000	△100,000
文房具	10,000	10,000	0
全国大会	300,000	250,000	50,000
人件費	40,000	40,000	0
インターネット接続費	24,000	24,000	0
印刷代	40,000	40,000	0
事務局運営費	100,000	100,000	0
モノグラフ補助費	100,000	200,000	△100,000
研究助成金	200,000	200,000	0
分科会助成金	0	100,000	△100,000
10周年記念事業費立金	703,854	500,000	203,354
次年度繰越金	269,457	303,693	△34,236
合計	2,417,311	2,437,693	△20,382

今年度の会費を納めていない方は納入方お願い致します。

会費は、一般会員 5,000円

学生会員 3,000円

郵便振込先は、

加入者名：日本「アジア英語」学会

口座番号：00280-8-3239 です。

お問い合わせは、会計担当の加藤三保子理事

(mihoko@hse.tut.ac.jp) までお願いします。

紀 要 編 集 委 員 よ り

津田早苗 (東海学園大学)

『アジア英語研究』8号が6月20日に刊行されました。5件の投稿の内、査読の結果4件の研究論文が採用され、書評を加え充実した内容となりました。投稿・査読をしてくださった会員・委員の皆様にお礼申し上げます。今年度は海外の会員にお送りした査読結果入りの郵便物が途中で紛失するという事故がありました。次号から査読結果を郵便でお送りする際にメールでも著者に連絡をし、いつ頃査読結果が返送されるかがわかるようにしたいと思います。

8号巻末掲載の「投稿規程」は従来の規定と一部変わっています。9号からは査読に回る原稿にお名前を書かないでいただくこと、最終原稿はフロッピーディスクのかわりに添付ファイルで送っていただいてもよいことなどが主な変更点です。

(ただし、ハードコピーも送っていただくことを忘れないようお願いいたします。) 規定のB5用紙も海外の投稿者にとっては手に入れにくいサイズですが、しばらくB5を使用いたします。用紙が手に入らない場合はメールで編集長にご相談ください。

モノグラフについては随時受け付けております。現在モノグラフ5号を印刷中です。『アジア英語研究』9号の原稿締め切りは11月末日です。多くの会員の皆様のご投稿を期待いたします。

ニューズレター編集担当より

JAF AEのニューズレターは毎年2号を発行していますが、このたび、秋(10月下旬~11月上旬)に増刊号を発行する予定です。

会員の皆様からとくに次の2点についての記事を募集致します。

1) JAF AE10年を振り返って

JAF AEは10歳になります。この10年間を振り返って、学会への思い、コメント、期待などを熱く語っていただきたいと思います。

2) 紀行文・エッセイなど

国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報・画像、海外の新聞記事紹介など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードとする読み物

をお願いします。自分が知っているだけではもったいない、是非誰かと情報を共有したい、そんな情報をお持ちのあなた。どうかこの機会を通じてシェアして下さい。

いずれの場合も、800~1,200 字程度で奮って投稿下さい。

書いてみようというご意志がありましたら、9 月下旬までに編集担当（相川, aikawa@nnc.or.jp）までお知らせください。

国際会議情報（アジア周辺）

TESOL World Calendar of Events より

Asia TEFL International Conference

"Spreading Our Wings: Meeting TEFL Challenges,"

Venue: Seinan Gakuin Univ. Fukuoka, Japan.

Date: August 18-20, 2006

Contact: Rob Dickey, Gyeongju Univ. S.Korea

E-mail: AsiaTEFL@2-mail.com.

Web site: <http://www.asiatefl.org>.

International Association for World Englishes

"Theory and Application: World Englishes in World Contexts,"

Venue: Chukyo Univ. Nagoya, Japan,

Date: October 7-9, 2006

Contact: James D'Angelo

E-mail: dangelo@lets.chukyo-u.ac.jp

Web site: <http://we.lets.chukyo-u.ac.jp/iawe2006>.

Korea TESOL 2006

"Advancing ELT: Empowering Teachers, Empowering Learners,"

Venue: Sookmyung Women's Univ. Seoul

Date: August 28-29, 2006

E-mail: KOTESOL2006@gmail.com

Web site: www.kotesol.org/conference/international/2006

English Teachers' Association - R of China

"Border Crossings: EFL/ESL/EIL/ or EGP/EAP/ESP,"

Venue: Chien Tan Overseas Youth Activity Center, Tapei, Taiwan.

Date: November 10-12, 2006

E-mail: etaroc2002@yahoo.com.tw.

Web site: <http://www.eta.org.tw>.

11th English South East Asia Conference

"English in Asia: Asia in English,"

Venue: Curtin University of Technology

Perth, Western Australia.

Date: December 12-14, 2006

Contact: Katie Dunworth

E-mail: k.dunworth@curtin.edu.au

Web site: info.dolie.curtin.edu.au/ESEAconference.cfm

ThaiTESOL

"Beyond Boundaries: Teaching English for Global Communication in Asia,"

Venue: The Imperial Queen's Park, Bangkok

Date: January 26-28, 2007

Contact: Maneepen Apibalsri

E-mail: maneepen12@gmail.com.

Web site: <http://www.thaitesol.org>.

編集後記：ニューズレターはJAF AE会員のコミュニケーションの場です。今回も盛りだくさんになって10頁になりました。投稿くださった皆様、ご協力感謝申し上げます。今年は秋に増刊号発行予定です。ご期待ください。皆様、良い夏をお過ごしください。

2006年7月25日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

印刷 (有)タナカ企画

事務局

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘 1-25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Hiroko Tina Tajima

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525

JAPAN

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

JAF AE's homepage: <http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239